

5月19日(日)、中学校「ミニオープンスクール」が行われました。270名を収容する協創ホールが満席に近い状態になるほどの児童・保護者の方に来校していただきました。中学校生活の様子などを動画等で紹介しましたが、みなさん真剣な表情で聞き入っていたのが印象的でした。

さて、5月27日(月)から、5人の教育実習生が来校しています。5人とも本校の卒業生ですが、「協創」と校名が変更する前の「広島修道大学附属鈴峯女子高校」最後の卒業生です。この日の全校朝礼では、挨拶と簡単な自己紹介がありました。代表の実習生から「母校での教育実習ということで緊張していますが、生徒のみなさんと共に学んでいきたいと思います。3週間、よろしくお願いします」と力強い挨拶がありました。

(右の写真は、中学校「ミニオープンスクール」の様子)



「デジタルデバイスの功罪」

本校生徒に限らず、中高生のほとんどの生徒がスマートフォンを所持しています。所持していない生徒を見つけるのが難しいぐらいです。所持する目的は様々ですが、大半は登下校途上における安全面を目的としています。本校では校内への持ち込みを許可していますが、5月初旬からはそれまでの電源オフからサイレントモードでの持ち込み許可としました。理由は非常時(災害等)の連絡に即応できることが目的です。

スマートフォン所持は安全面だけが目的ではないことは言うまでもありません。家族や友だちなどとの連絡ツールとして、日々のニュースや情報を確認・収集するツールとして、そして、日常生活をサポートするためのツールとして欠かせない存在になっています。しかし、一方ではSNSに関して、あるいは、長時間使用(生徒に聞くと、1日5時間以上も画面を見ているという生徒がいます)に関して、様々な問題が指摘されていることも周知の実態です。

次のような記事を見つけました。5月11日付の『毎日小学生新聞』の記事です。「スマホ長時間で学習努力『水の泡』」というタイトルの内容です。

スマートフォンやタブレット端末を長時間使う子どもは、家庭学習をいくら頑張っても学力が伸びない。そんな衝撃の結果が示された。スマホ使用で学習時間が減るのではなく、努力して学習しても身につかないというのだからより深刻だ。どうする？

研究結果を発表したのは、東北大学教授で脳について研究する川島隆太さん。事故や病気で衰えた認知機能を改善する「脳トレ」の考案者として知られている。川島さんは、スマホなどデジタル機器の小さい画面で映像や画面を見ることで、人が何かを学んだり想像したりしているときに脳内で働く機能の活動が抑制されることを確認し

たという。

川島さんは、宮城県仙台市内の公立中学校に通う全児童・生徒7万人以上の学力や生活習慣に関するデータの提供を受けている。小学校5年生～中学3年生(約3万6000人)を対象としたスマホ・タブレットに関する研究に乗り出したところ、驚くべきことが判明した。

スマホ・タブレットの使用時間が1日1時間未満の子どもたちの学力(国語・算数・理科・社会の平均偏差値)は、家庭学習を全くしない子どもたちでも平均に届いていたのに対し、使用時間が1時間以上の子どもの学力は家庭学習を全くしないグループでは平均に届かず、1日1～2時間家庭学習をしているグループでようやく平均に届いたのだ。

また、対象者のその後も確認したところ、長時間使用を続けた子どもたちは学力が低い状態が続いたほか、途中で長時間使用を始めた子どもたちも翌年から極端に学力が下がっていた。逆に長時間使用していた子どもたちが途中で使用時間を短くしたところ、翌年から学力が向上したという。川島さんは、「スマホ・タブレットの長時間使用は、学力の伸び悩みの原因となっている」と話す。(中略)国が進める「GIGAスクール構想」で、全国の小中学生には1人1台のデジタル端末が配られている。川島さんは、端末の持ち帰りはせずに、家庭では端末から距離を置く「デジタルデトックス」(一定期間デジタルデバイスから距離を置き、ストレスを軽減すること)をするよう呼び掛けている。

スマホ・タブレットなどのデジタルデバイス、特にスマートフォンの功罪を明確にし、何が生徒にとって必要なことなのかなど、児童・生徒の成長を見守ることの重要性を再認識する必要があるように思われます。そして、学校での周知徹底を含め、家庭での取り組みが鍵となるのではないのでしょうか。